

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K01192

研究課題名(和文) 地理教育におけるコンピテンシーの開発に関する研究

研究課題名(英文) Study on the development of competencies in geographic education

研究代表者

池 俊介 (Ike, Shunsuke)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：30176078

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、コンピテンシー重視のカリキュラムへの転換が早期に進められたヨーロッパ諸国における地理コンピテンシーの特徴を明らかにするとともに、日本の学校教育で育成すべき地理コンピテンシーの内容について検討することを目的とした。その結果、近年、汎用的コンピテンシーと地理の専門的知識とをバランスよく育成することが大きな課題となっており、それを実現するための方法として、ポルトガルでは探究型のフィールドワークが、ドイツでは「ミステリー」という学習活動の普及が進められつつあり、ヨーロッパ諸国では地理コンピテンシーの育成を目指した具体的な学習活動の開発に重点が置かれていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現行の学習指導要領では「資質・能力」の育成が目指され、コンピテンシー重視のカリキュラムへの転換が図られているが、日本の地理教育におけるコンピテンシー研究の蓄積は乏しく、コンピテンシーの具体的な育成方法についての議論はほとんど進んでいない。本研究では、コンピテンシー研究の先進事例が見られるヨーロッパ諸国の地理教育の実態を踏まえて、コンピテンシーを育成するための具体的な学習活動のうち「フィールドワーク」と「ミステリー」の詳細な内容を明らかにすることができた。これらの成果は、日本におけるコンピテンシーへの理解と授業での活用を促進するために不可欠な知見であり、その学術的意義は高いと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the characteristics of geographic competencies in European countries that made an early shift to a competency-oriented curriculum, and to examine the content of geographic competencies that should be developed in Japanese school education. As a result, it became clear that a major challenge has been to develop a good balance between generic competencies and specialized knowledge of geography. In order to solve this problem, inquiry-based fieldwork is being promoted in Portugal and "mystery" learning activities are being promoted in Germany, indicating that European countries are focusing on the development of specific learning activities aimed at fostering geographic competencies.

研究分野：地理教育論

キーワード：コンピテンシー 地理教育 カリキュラム ヨーロッパ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、コンピテンシー(教科固有あるいは教科横断的な汎用性のある能力)に関する研究が教育界の国際的な潮流となっている。「何を知っているか」だけでなく「それを使って何かができる」こと、すなわち単に知識や技能を習得するだけでなく、特定の文脈の中で複雑な課題に対応することができる力の育成に強い関心が向けられるようになった。

(2) こうしたコンピテンシーを重視する動きは、当然ながら日本の教育界にも大きな影響を与えており、現行の学習指導要領においても従来の学習内容重視のカリキュラムからコンピテンシー重視のカリキュラムへの転換が目指され、「資質・能力」の育成が中心的な課題として位置づけられた。

(3) 日本の地理教育では、早くから学習指導要領に「地理的な見方や考え方」が明確に示されるなど、「暗記科目」から脱却するための試行錯誤が繰り返されてきたが、現在でも多くの地理授業では知識の習得そのものに重点が置かれる傾向が強く、「暗記科目」としてのイメージを払拭するまでには至っていない。そのため、従来のように単に地理的な知識やマニュアル的なスキルの習得を図るだけでなく、「コンピテンシー」をいかに育成すべきかを検討する必要がある。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、地理の専門的コンピテンシーの開発が先行的に進められ、コンピテンシー重視の地理教育カリキュラムがすでに実践されているヨーロッパ諸国(英語圏、ドイツ語圏、ポルトガル語圏)を対象とする現地調査を実施し、各国において地理教育で育成が目指されているコンピテンシー(地理コンピテンシー)の内容の全体像とその特徴を把握するとともに、コンピテンシー開発の方法を詳細に明らかにすることを目的とした。

(2) 先進地域でのコンピテンシーを軸とする地理教育カリキュラムの特徴、およびその問題点について明らかにするとともに、それらの成果を踏まえて、日本の学校教育で地理授業を通して育成すべきコンピテンシーの内容を整理し、コンピテンシーを軸とした地理教育カリキュラムについて検討することにした。

3. 研究の方法

(1) ヨーロッパ諸国における地理コンピテンシーの開発状況と、コンピテンシーを軸としたカリキュラムの特徴および課題を明らかにするために、コンピテンシー研究に関する先進的な事例が見られるドイツ語圏の国々、「ジオ・ケイパビリティ」という概念で同様の先進事例が見られるイギリス、コンピテンシー重視のカリキュラムが実施されるとともに、学習内容重視への揺り戻しが起こっているポルトガル、の3つの地域を対象とした現地調査を分担して実施する(コロナ禍の下で現地調査が実施できなかったため、実際には各自がもつ人脈を活用して資料・情報の収集を行った)。収集した資料・情報の分析を進め、具体的な地理コンピテンシーの作成方針を検討する。

(2) これらの調査で得られた成果を踏まえて、中学校・高等学校を対象としたコンピテンシー育成を重視した地理教育カリキュラムのあり方を検討し、カリキュラム開発に向けた方向性や今後の課題を明確化する。

4. 研究成果

(1) 世界的なスケールで見た場合、地理教育はコンテンツ重視のカリキュラムからコンピテンシー重視のカリキュラムへと転換する方向でカリキュラム改革が進められてきた。しかし、ヨーロッパ諸国について見ても、コンピテンシーをめぐる地理教育の動向は決して一様ではない。例えばイギリスでは、1980年代から始まる教育改革の中で「キー・スキル」と呼ばれる汎用的能力がナショナル・カリキュラムで育成すべき目標として明確に位置づけられた。その後、コンピテンシー重視のカリキュラム改訂が行われた結果、汎用的コンピテンシーそのものを育成しようとする傾向が強まり、各教科の専門的知識の軽視が大きな問題として取り上げられるようになった。そうした流れの中で近年着目されているのが「力強い学問的知識(powerful disciplinary knowledge: PDK)を重視する「ジオ・ケイパビリティ」論の展開である。一方、ドイツでは2006年の「地理教育スタンダード」において、従来から教えられていた地理的知識や空間的オリエンテーションに加えて、情報獲得、コミュニケーション、評価判断、そして行動にまでおよぶ幅広い汎用的コンピテンシーの育成も求められることになった。しかし、ドイツ各州では教科横断的な汎用的コンピテンシーよりも各教科で育成すべき専門的コンピテンシー(専門的知識を含む)に大きな比重が置かれ、コンピテンシーと知識の両立が目指されている点に特徴がある。また、ポルトガルでは2001年の「ナショナル・カリキュラム」を契機として、それ

までのコンテンツ重視のカリキュラムからコンピテンシー重視のカリキュラムへの転換が図られた。しかし、急激な変化に多くの現場教師は対応ができず、「ナショナル・カリキュラム」は僅か10年で失効に追い込まれた。その後、知識重視へのカリキュラムの方向転換が鮮明に打ち出されたが、2018年に公表された「必要とされる学習」(ナショナル・スタンダードに相当する)では、知識・スキル・態度のバランスのとれた育成が重視され、汎用的コンピテンシーと専門的知識の止揚が図られている。とくに「必要とされる学習」では、教科固有の知識の構築に不可欠な内容の豊かさと確実さ、これらの知識の獲得のための生徒たちに育成される認識のプロセスの豊かさ、の2点に大きな特徴が見られ、知識重視からコンピテンシー重視へ、そして知識重視への揺り戻しを経て、ようやく両者のバランスを考慮したカリキュラムへと落ち着いた。このように、汎用的コンピテンシーと教科の専門的知識との関係のあり方が、これらヨーロッパの国々においては大きな課題となってきた。

(2) 汎用的コンピテンシーと教科の専門的知識との関係については、これまでもその両立を図ろうとする試みが見られた。例えば、学士課程・修士課程で習得される地理学の専門的知識と汎用的コンピテンシーの「合流」を目指して2000年から始まったTUNINGプロジェクトの成果は、高等教育を対象としたものではあるが、両者のすり合わせを考える上で非常に参考になる。例えば、このプロジェクトでは「分析・総合のための能力」「外国語の知識」「調査スキル」「チームワーク」「自発的に作業するための能力」「仕事上の倫理に対する責任」など全31項目の汎用的コンピテンシーが挙げられている。一方、地理学の専門的コンピテンシーについては、「地域・場所・位置の多様性と相互依存性を理解し説明する」「地理的概念についての理解を応用する」「景観を解釈する」「地理の多様で専門的な技術・アプローチを使用する」など全12項目に整理されている。注目すべきは、これらの汎用的コンピテンシーと専門的知識を同時に育成する学習活動としてフィールドワークが重視されている点である。実際に、ポルトガルでは地理的知識の習得と汎用的コンピテンシーの育成の両方を目指した「私たちは提案する!」と呼ばれる探究型フィールドワークの国際的イベントが開催され、大きな成果をあげている。一方、ドイツではイギリス発祥の「ミステリー」と呼ばれるアクティビティが地理授業に活用されており、地理的知識の育成と同時に共同作業を通じて育まれる汎用的コンピテンシーを重視している点に特徴が見られる。このように、ヨーロッパの国々では、汎用的コンピテンシーと専門的知識の両立を図るための手段として、フィールドワークや「ミステリー」など授業レベルでの具体的な学習活動についての検討が進んでいることが明らかとなった。

(3) 国際的なフィールドワーク・イベントである「私たちは提案する!」プロジェクトは、ポルトガルのリスボン大学地理学・地域管理研究院(IGOT)が主体となり2011/2012年度に始められ、現在はポルトガル語・スペイン語圏の7カ国の高校生を中心とする生徒たちから構成される400件を超えるグループが参加している。このプロジェクトの特徴は、フィールドワークを中核に据えた探究活動を行うことを目的としている点と、フィールドワークの対象地域を生徒の日常生活地域に限定している点にある。フィールドワークでは、生徒が自ら生活する地域の課題に着目し、その解決に向けて課題を多面的に考察する活動が求められるほか、グループワークや地域での調査活動を行う中で汎用的コンピテンシーの育成が目指されており、生徒たちから「提案」を受ける側の地方自治体からも高い評価を得ている。こうした探究型フィールドワークの実施は、汎用的コンピテンシーの育成と地理的知識の獲得との両立を図る方法として重要性が高い。

(4) イギリス発祥の地理プロジェクト「地理を通して考える(Thinking through Geography)」に端を発する学習手法である「ミステリー」は、広くドイツ国内の学校に普及している。ミステリーでは、生徒が3人程度の小グループに分けられ、20~30枚のカードが渡される。最初に生徒は、教師が読み上げる3つ程度のストーリーを聴く。これらのストーリーは断片的であり、なおかつ互いに内容が噛み合わないため、生徒の頭には疑問や謎(ミステリー)が生じるが、この謎を解くためにカードに書かれた事象を並び替えてつながりを探し、うまくつながると謎が解けるような仕組みになっている。この学習活動は、現実社会における出来事の原因を理解するためや、地理的事象のパターンやプロセスを考える際に必要となる思考スキルの育成にも貢献している。とくにドイツでは、ネットワーク思考やシステムコンピテンシーの育成を目的としたミステリー教材の開発・研究が積極的に進められており、ミステリーは汎用的コンピテンシーの育成と地理的知識の獲得の両立を図る方法の1つとして機能している。

(5) 研究当初は、コンピテンシー重視の地理教育カリキュラムの検討そのものに関心を向けていたが、ヨーロッパの国々では既にコンピテンシーを育成するための具体的な学習活動についての検討が進められていることが調査の過程で明らかとなった。コンピテンシーの育成を重視した地理授業を実現するには、むしろこうした具体的な学習活動に関する研究・開発が必要となるため、今後はこれらの学習活動に関する研究を進めて行く予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 池俊介	4. 巻 32
2. 論文標題 地理教育における探究型フィールドワークの普及のための取組み - 「私たちは提案する！」プロジェクトを事例に -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井田仁康	4. 巻 91 (5)
2. 論文標題 「地理総合」の方向性と防災教育の位置付け	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 科学	6. 最初と最後の頁 482-485
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井田仁康	4. 巻 69 (1)
2. 論文標題 高等学校「地理探究」と東南アジア・オセアニア地誌学習	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新地理	6. 最初と最後の頁 69-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshiyasu Ida	4. 巻 1
2. 論文標題 Resilience for global citizenship: disaster prevention and global education	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Southeast Asian Education	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井田仁康	4. 巻 69 (3)
2. 論文標題 子どもたちが画定する地域区分とSDGs	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新地理	6. 最初と最後の頁 131-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本隆太	4. 巻 77 (6)
2. 論文標題 学校での水防災教育を包括的に支援する教員の養成・研修と教材開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 河川	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本隆太・濱谷佳奈	4. 巻 18
2. 論文標題 ドイツの気候変動教育の現状と課題 - 初等・中等学校における地理・宗教・哲学教育での気候変動の扱い -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 静岡大学教育研究	6. 最初と最後の頁 97-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井田仁康	4. 巻 69-5
2. 論文標題 「地理総合」の設立 - 未来志向の地理教育へ -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 都市計画	6. 最初と最後の頁 104-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井田仁康	4. 巻 40-4
2. 論文標題 「地理総合」総論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地図情報	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本隆太	4. 巻 2
2. 論文標題 大井川下流域の水防災教材の開発 - 「水にまつわる地域の歴史 大井川」を事例として -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 静岡大学地域創造教育研究	6. 最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池俊介	4. 巻 67-3
2. 論文標題 コンピテンシー重視の教育改革と地理教育の課題 - ポルトガルの経験に学ぶ -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新地理	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池俊介	4. 巻 30
2. 論文標題 ポルトガルにおけるコンピテンシー重視の地理教育をめぐる近年の動向	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池俊介・山本隆太・齋藤亮次・吉田裕幸	4. 巻 34-1
2. 論文標題 地理教育におけるフィールドワークの類型化に関する試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田教育評論	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井田仁康	4. 巻 24-11
2. 論文標題 「地理総合」とは何か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 10-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本隆太・荒井正剛	4. 巻 67-1
2. 論文標題 つなげて総合する地理のシステム思考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新地理	6. 最初と最後の頁 65-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本隆太	4. 巻 74-3
2. 論文標題 スイス・ドイツの「地理システムコンピテンシー」(GeoSysKo)の特性 - 実証試験問題の分析 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地理科学	6. 最初と最後の頁 127-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20630/chirikagaku.74.3_127	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 山本隆太
2. 発表標題 国際的な視野からみた地理学と地理教員養成の関係 - ケイパビリティとコンピテンシーの対比 -
3. 学会等名 日本地理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池俊介
2. 発表標題 探究型フィールドワークの普及のための取組み - 「私たちは提案する！」プロジェクトの事例 -
3. 学会等名 日本地理教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本隆太
2. 発表標題 ドイツ地理教育にみるコンピテンシーの育成と測定
3. 学会等名 東北地理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshiyasu Ida, Satoru Itoh, Masataka Tamekuni, Yoshihiro Ugawa and Hiroaki Akimoto
2. 発表標題 Geography class development for the reading map with AR
3. 学会等名 IGU-Commission on geographical education conference, Prague (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshiyasu Ida
2. 発表標題 Pre-service teacher training and In-service teacher training: Response to COVID-19 for geography education in Japan
3. 学会等名 10th SEAMEO-University of Tsukuba Symposim
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井田仁康
2. 発表標題 社会科教育、地理教育、防災教育の違いと接点
3. 学会等名 日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 池俊介・齋藤亮次・山本隆太・吉田裕幸
2. 発表標題 高校生を対象としたフィールドワーク・イベントの試み
3. 学会等名 日本地理教育学会第70回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井田仁康
2. 発表標題 The International Geography Olympiad and Geography Education in Japan.
3. 学会等名 JpGU-AGU Joint Meeting
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井田仁康
2. 発表標題 How to protect yourself from disasters.
3. 学会等名 The third JEARSS-ISSA International Forum
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井田仁康
2. 発表標題 新しい地理教育のスタートに向けて
3. 学会等名 日本地理学会2021年春季学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池俊介
2. 発表標題 コンピテンシー重視の教育課程と地理教育の課題
3. 学会等名 人文地理学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井田仁康
2. 発表標題 The panel, Supporting Geographical Education: Perspective from Associations.
3. 学会等名 2nd International Congress on Geographical Education
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本隆太
2. 発表標題 ドイツにおける人地理学領域のシステム概念とその地理教育への影響
3. 学会等名 人文地理学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 池俊介・山本隆太	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 192
3. 書名 地理教育フィールドワーク実践論（池俊介編）	

1. 著者名 池俊介	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 179
3. 書名 大学生のための中等社会科・地理歴史科・公民科概論（田部俊充ほか編）	

1. 著者名 井田仁康（分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 234（うち19-34）
3. 書名 地理歴史授業の国際協働開発と教師への普及（伊藤直之編）	

1. 著者名 井田仁康・池俊介・山本隆太	4. 発行年 2021年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 326
3. 書名 持続可能な社会に向けての教育カリキュラム（井田仁康編）	

1. 著者名 井田仁康・山本隆太	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 250
3. 書名 社会科教育へのケイパビリティ・アプローチ（志村喬編）	

1. 著者名 山本隆太	4. 発行年 2021年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 138
3. 書名 システム思考で地理を学ぶ（地理教育システムアプローチ研究会ほか編）	

1. 著者名 池俊介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 126
3. 書名 大学生のための初等社会科概論（田部俊充編）	

1. 著者名 井田仁康	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 339
3. 書名 Education for Sustainable Society	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井田 仁康 (Ida Yoshiyasu) (20203086)	筑波大学・人間系・教授 (12102)	
研究分担者	山本 隆太 (Yamamoto Ryuta) (80608836)	静岡大学・地域創造教育センター・准教授 (13801)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------